

# 相談援助実習での帰校日指導の効果

高橋昌子

The effect of the guidance regarding date of  
return to school by Consultation Support Training

Masako TAKAHASHI

## 要旨

相談援助実習での毎週1回の対面指導である帰校日指導は、従来の社会福祉援助技術現場実習に比べて、より効果的な実習中の指導となっている。特に、社会人実習生の多い通信教育課程においては、時間的、体力的、経済的、人間関係等を課題として抱えながらも、利点は多い。本稿では、帰校日指導の効果を通して、より質の高い相談援助実習指導を考える。

キーワード：相談援助実習、帰校日指導、社会福祉士、社会福祉士養成教育、社会人学生

## はじめに

社会福祉士養成校では、より実践力の高い社会福祉士の養成を目指した相談援助実習（以下、本実習）が、2007年12月の社会福祉士及び介護福祉士法改正法の成立により本格的に始まっている。従来の社会福祉士養成教育では、本実習中の実習指導教員から受ける対面指導は実習中最低1回の巡回指導が主であったが、新しい養成教育体制では、毎週1回は実習生が実習指導教員から対面指導を受けるというシステムに変わった。実習中のきめ細かな指導につながる本システムの一つの形式として「帰校日指導」が挙げられる。筆者は、相談援助実習の指導教員として帰校日指導も担当しており、本指導の効果について一考察を加えることとする。

## 1. 研究目的

本学の通学、通信における相談援助実習では、本実習中、最低1回の実習巡回指導に加え、毎週、木曜日に帰校日指導を行っている。本取り組みに

ついては、「新カリキュラムでの相談援助実習への取り組み－帰校日指導の効果を通して－」、「大学通信教育部における相談援助実習への取り組み」等で記した。しかしながら、開始間もない前回のアンケート調査では、調査対象となる通信教育部の実習生が24人と少人数であった。本稿では、同通信教育部での調査の継続のために、47人の調査結果をもとに、福祉現場で求められる、実践力の高い社会福祉士の養成に帰校日指導という新たな指導方法が、どのような効果をもたらしているのかを再考する。

## 2. 研究方法

調査対象と属性については、以下の通りである。

本学の通信教育部で2010年6月～2012年7月に本実習を実施した実習生のうち、筆者が指導を担当した学生に対し、帰校日指導に対するアンケート調査を実施した。有効回答者47人の年齢は未記入としたため、性別のみの属性として、女性38人、男性9人であった。

### 3. 研究結果

(1) 指導を受けている自分に対する評価(図1)

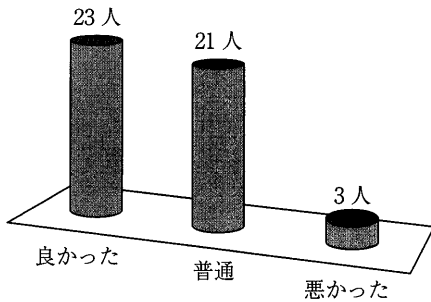


図1 指導を受けている自分に対する評価

(2) 帰校日指導の効果(図2)

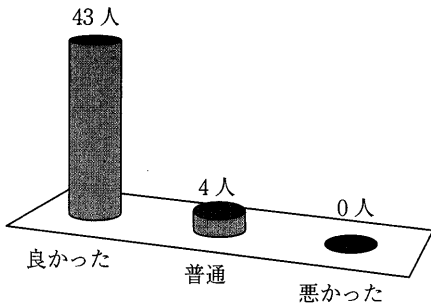


図2 帰校日指導の効果

(3) 帰校日指導内容記録の記入について(図3)

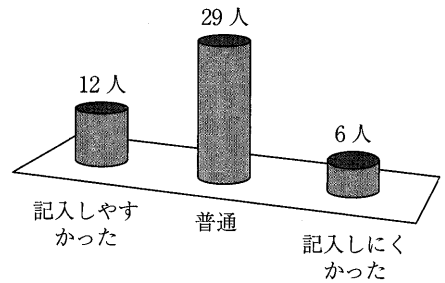


図3 帰校日指導内容記録の記入について

(4) もし、帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていたと思うか(自由記述)(表1)

### 4. 考察

上記、図1では、帰校日指導を受けた自己評価として、94%の実習生が「良かった」、または「普通」であり、積極的でまじめに帰校日指導を受けていた。通信教育部では社会人が多く学んでおり、本実習においても、現在、社会福祉現場で働いている者、以前、社会福祉関連の職に就いてい

表1 帰校日指導がなかった場合の、実習への取り組み方について

事項	人数(人)
実習目標からそれていることに気づかず、行動修正や軌道修正ができなかったと思う。	10
緊張や不安が大きかったと思う。	7
記録の学びが少なく、実習日誌が言葉の羅列や感想文のままであったかもしれない。	7
励ましがなかったらストレスが解消できず、心身共に疲れて長期間の実習に耐えられなかった。	6
自分の間違った考え方や視点、社会人としての配慮など、修正すべきことに気づけなかった。	5
実習生の主観で実習を進め、学ぶ視点が明確にできていなかったように思う。	5
帰校日に他の実習生の様子がわかってよかった。	3
他の実習生と会えなかったら実習の大変さを共有できず、孤独感が増すように思う。	3
単調な実習への取り組みになったかもしれない。	3
遠方の実習生には、時間や費用等負担になるが、モチベーションを保つためには役立つと感じた。	3
自分自身の学びの成長を実感できないままの実習になっていた。	2
課題をクリアできず、実習中に生じる課題も解消できなかったと思う。	2
同時期の実習生の話を聞くことで、視点を変えることができたし、学びも深まった。	2
指導教員の励ましが力になった。	2
実習の振り返りや反省の場がなかったと思う。	2
実習指導者に聞きづらいことを帰校日で実習指導教員に聞くことができた。	2
指導の重要性に気づけなかったのではないかな。	2
目標をもてずに課題を見つけることなく、日数をこなすだけになったと思う。	1
半日かかるため、時間の負担、経済的負担は大きいと思った。	1
あまり変わりはないと思う。仕事との両立がつかった。	1
自己覚知ができなかったと思う。	1

た者、社会福祉の分野以外での就業経験のある者等、これから社会へ飛び立とうとする通学部の学生とは異なる生活背景や経験がある。そのため、社会人としての対応は習得していても、実習生や学生という学びの姿勢が確立されていない者も存在する。残念ながら、実習先からは社会人学生への指導に対して、戸惑いや厳しい注意を受けることもある。毎日、実習先の実習指導者からスーパービジョンを受け、さらに、毎週1回は養成校の実習指導教員からスーパービジョンを受けるといふ、二重のスーパービジョンを強化した新カリキュラムでの実習教育が、こうした通信教育部の学生（以下、通信生）にとっては実習生としての学びの姿勢をも教育しているといえるのではないだろうか。実習におけるスーパービジョンについて川島は、「これまでの指導体制は各養成校、実習施設・機関の都合や担当者によって必ずしも一定基準の指導になっていたわけではなく、その内容や指導方法にばらつきがあった。」<sup>1)</sup>と指摘する。そのために見直された実習教育では、実習スーパービジョンが位置づけられ、実習指導者及び実習指導教員がそれぞれ実習生に対して、スーパーバイザーとしての役割を担っていくことが明確にされたのである。社会福祉用語辞典では、スーパービジョンを「スーパーバイザーが、援助者であるスーパーバイザーから、担当している事例の内容、援助方法について報告を受け、それに基づきスーパーバイザーに適切な援助指導を行うこと。スーパービジョンの機能として、①管理的機能、②教育的機能、③支持的機能、の三つが挙げられる。また、個人単位で行われる個人スーパービジョンや、何人かを集めて行うグループ・スーパービジョンなどがある。」<sup>2)</sup>と記されている。また、現代社会福祉用語の基礎知識では、「対人援助の専門職者が自分自身の考え方や行動に自信が持たなかったり、自らでは気づかない好ましくない行動をとっているような場合に、他者からの視点で助言を得たり指摘を受け、自らの行動を修正していく一連の取り組み」<sup>3)</sup>がスーパービジョンを指すとされている。自らでは気づかない好ましくな

い行動を実習中に指摘されることにより自己覚知を深め、1週間ごとの帰校日指導により、実習目標や取り組み方への修正に気づいた実習生は多かった。特に、相談援助という専門分野においては、誰にでも当てはまるという確固たる正解があるわけではない。二重のスーパービジョンを受ける実習生にとって、帰校日指導が新カリキュラムでの実習スーパービジョンとして位置づけられた効果が、ここでも証明されているといえよう。

次に、図2からは、帰校日指導の効果を否定的に捉える実習生はおらず、帰校日指導が非常に効果的であることがわかる。本項目については、自由記述をまとめた表1と共に考察を加えることとする。

まず、前述したように、実習内容等の軌道修正に大きな効果があることがわかる。また、メンタル面でのサポートにも大きく寄与している。誰もが実習開始当初は、緊張や不安を抱えているが、その緊張や不安、さらに実習中のストレスが蓄積されたまま実習が進んでいくのではなく、直接、実習指導教員に悩みや不安を打ち明けることは、相談援助の専門技術習得にもつながる部分が多い。新カリキュラムでの新たな視点である「社会福祉士像形成能力」を、実習指導教員のなかに見出すこともできるのではないだろうか。悩み等を打ち明けるのにとどまらず、相談援助の専門家でもある実習指導教員から、適切な励ましやアドバイスを受けることは、実習生自身の精神的安定を図るとともに、実習先での利用者や対象者への対応の仕方を考えるきっかけともなろう。柳澤<sup>4)</sup>は、実習に臨む多くの学生の戸惑い、疑問、違和感について、「社会福祉の現場実習の意味や教室で学ぶ相談援助に関する知識や技術の意味を改めて問わざるを得なくなる。」と指摘する。さらに、「社会福祉の実習の機会において生まれてきたさまざまな問いは、基本的に、われわれの生活においても重要な意味を持っているということである。」と強調する。日常相談も我々の生活に深く関わる相談行為であり、その相談行為が相談援助実習に関わることであるならば、なおさら、毎週

1回の帰校日は実習生の相談行為に対する指導でもある。

さらに、表1からは、帰校日での記録や実習ノートに対する指導が効果的であったことがわかる。実習前にはスクーリングで具体的な記録についての指導を受けるが、いよいよ実習が始まり、社会福祉現場では机上の学びがいつでもどんな場面でも活用されているかについては、不安がある。実習日誌は、実習生が実習中に1日単位で記録し、毎日の学びを文章化、明文化するものである。そのため、実習生だけでなく、実習指導者や実習指導教員にとっても重要な様式書類といえる。実習日誌の意義を、山本<sup>5)</sup>は「実習生のための実習内容のリフレクションと実習先・養成校のための実習マネジメントの根拠の2つを見ることができる。」と説明している。そして、「実習生は、実習先での体験を客観的に捉えなおし、(中略)実習先の実習指導担当者や養成校の実習指導教員は、それらの記録を根拠として、実習生が目標の達成に向けてより深い学びを得ることができるよう、実習プログラムの点検や実習スーパービジョンを図っていく。」と続ける。こうした重要な実習日誌への取り組みは実習期間中、毎日続くため、実習開始当初の本実習生にとっては、大きな負担となっている。書き方、内容の問題に加え、時間的问题も明日の実習に備える実習生にとっては大きな課題でもある。そのため、「作文や感想文で終わっている。」などの実習先からの注意や指摘に対して、帰校日指導では、実習日誌に対する具体的な指導を受けることができるため、旧カリキュラムの記録の力に比べ、成長や進歩がみられる。田中<sup>6)</sup>は、体験したことを羅列し、感想を書くだけであれば、日記になってしまうことを明記し、客観的に事実をとらえることが求められるとしている。そして、「自分自身がソーシャルワーカーとして未熟であることに気づくことになり、自分自身を成長させるチャンスととらえ、日誌を書く際には、ふりかえる勇氣、言語化する勇氣をもちましよう。」と締め括っている。

このように、表1からは、実習内容等の軌道修

正と、記録や実習ノートに対する指導が大きな効果を示していることがわかる。さらに、実習先の異なる実習生が帰校日に会することにより、他の実習生の様子を知り、お互いに情報交換や課題や悩み等を共有することにより、実習指導教員からの指導とともに効果があった。他の実習生を客観的にみる機会でもあり、実習生自身の自己覚知につながる機会にもなった。よい援助関係の構築には、共感が必要であることはソーシャルワークスキルとして知られている。パメラは、「共感とは、我々自身が他者の身になることを意味し、他者の感情、思考、行動や動機を感じ、理解することができるということである。共感とは、他者の経験や他者の考え方の独自性、個人の行動の準拠枠となるものをできる限り注意深く、敏感に理解しようとするということも意味しているのである。」<sup>7)</sup>としている。共感のスキルを、実習生同士がお互いに帰校日指導のなかで磨いていくことになるのではないか。

しかし、帰校日が前述の効果よりも負担であったと感じている実習生もいる。通信生の特徴として、仕事と両立しながらレポート学習やスクーリング等に取り組む学生も多いが、本実習においても、有給休暇の活用や職場や家族の協力のもと、約1カ月間という実習期間を捻出している学生もいる。毎日、実習先へ赴くだけでなく、実習時間には含まれない毎週1回の帰校日のために養成校に出向き、個別指導を受けるということは、時間的にも経済的にも負担が大きいと訴えた学生も、わずかではあるが存在することが明らかとなった。岡部が行った社会人学生に対する調査<sup>8)</sup>によると、「仕事や家庭の調整の苦勞」について、非常に苦勞したが41.8%、多少苦勞したが47.3%、計89.1%と約9割の学生が何らかの苦勞を経験している。当然、通学生も様々な苦勞を感じながら実習に取り組んでいるが、社会人としての立場と共に、職業人としての側面を併せもつ通信生にとって、職場と家庭との調整という苦勞がクローズアップされてくる。理解と協力を得ながらも、1か月以上の実習期間を確保するのは容易ではな

い本実習生にとって、時間的、体力的、経済的、さらには人間関係に至る諸問題の軽減は、帰校日指導の課題の一つとして捉える必要がある。

最後に、図3「帰校日指導内容記録の記入」については、学生によって記入のしやすさに差があった。適切な記入様式と具体的指導、わかりやすいシンプルな形式、翌日からの実習に役立つ等、記入しやすい理由が挙げられた。しかし、記入しにくい理由には、記録内容が多い、自己評価の記述が難しい等が指摘された。前述の、岡部の調査では、「社会人実習生の実習中における不安や心配な点」で、日誌の書き方が40.9%と、35.5%の体力面を抜いて一番高い割合となっている<sup>9)</sup>。文章化する能力、言語化する作業等、自分だけの日記やエッセイとは異なり、より一層、人に適切に伝える力が必要な記録の指導については、事前指導だけでは十分とはいえない。これは通信生に限らず、通学生も同様の傾向にある。実習ノートや実習日誌だけでなく、本帰校日指導内容記録も実習生の記録に対する教材でもある。各項目を自己評価で記述する本帰校日指導内容記録の形式は、客観的に自己覚知する技術と、それを文章化して相手に伝える表現力を学習できるように、さらに工夫を加える必要がある。

以上、本調査結果から帰校日指導の効果について考察を進めたが、新カリキュラムをどう教えるかという実践的な問題提起の書として参考となる「社会福祉士養成教育方法論」のなかで、「帰校日を設定した場合の授業のプログラム案：週1回の帰校日として5回分」という資料が示されている。回と主題のみを示すと、「第1回：①現時点で理解できた点、疑問が出た点の振り返り ②職場・利用者の理解、第2回及び第3回：①利用者とのコミュニケーションと倫理 ②職種理解 ③地域とのつながり、第4回：①ソーシャルワーカーと自己覚知 ②今後の実習の取り組み方、第5回：実習の終了までにすべきこと」<sup>10)</sup>とある。新カリキュラムでの職場実習、職種実習、ソーシャルワーク実習と細分化された実習内容に対し、より効果的な帰校日指導の進め方についても留意し

なければならない。

## おわりに

18歳人口の減少や多様な生涯学習の広がり等、社会人が社会福祉士を目指すことは珍しいことではなくなっている。本学で社会福祉士を目指す通信生にとって、相談援助実習への取り組みは、レポートやスクリーニングという学習形態とは大きく異なるようである。前述したように時間的、体力的、経済的、そして人間関係等を調整しながら取り組んでいる。社会人学生が陥りがちな失敗や対応が指摘される場合もあり、今後、相談援助実習教育については更なる工夫が必要である。本稿で考察を加えた帰校日指導の効果を活かすことにより、より質の高い実習指導を心がけたい。それが実践力のある社会福祉士を養成することにつながると考える。

## 引用文献

- 1) 川島恵美 (2011)「ソーシャルワーク実習養成校と実習先の連携のために」高間満・相澤譲治編, (株)久美, 99
- 2) 中央法規出版編集部編 (2007)「社会福祉用語辞典」(株)中央法規出版, 309
- 3) 成清美治・加納光子編 (2010)「現代社会福祉用語の基礎知識 第9版」(株)学文社, 163
- 4) 柳澤孝主・坂野憲司編 (2009)「相談援助の基盤と専門職」(株)弘文堂, 202
- 5) 山本秀樹 (2011)「ソーシャルワーク実習養成校と実習先の連携のために」高間満・相澤譲治編, (株)久美, 88
- 6) 田中和彦 (2011)「ソーシャルワーク実習ノート」杉本浩章・田中和彦・中島玲子著 (株)みらい, 38, 39
- 7) パメラ・トレビシック著 (2008)「ソーシャルワークスキル～社会福祉実践の知識と技術～」杉本敏夫監訳, (株)みらい, 214
- 8) 岡部真智子 (2012)「社会人のための社会福祉士」岡部真智子・杉本浩章編著, (株)学

文社, 20

9) 前掲 岡部真智子 (2012), 18

10) 川廷宗之編「社会福祉士養成教育方法論」(株)  
弘文堂, 250, 251

### 参考文献

- ・高橋昌子 (2010) 「新カリキュラムにおける相談援助実習指導への取り組み」神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要 第7号
- ・高橋昌子 (2010) 「新カリキュラムにおける社会福祉士養成教育－高齢者福祉分野での相談援助実習対応を通して－」神戸親和女子大学『教育研究センター紀要』第6号
- ・高橋昌子 (2011) 「新カリキュラムでの相談援助実習への取り組み－帰校日指導の効果を通して－」神戸親和女子大学『教育研究センター紀要』第7号
- ・高橋昌子 (2012) 「大学通信教育部における相談援助実習への取り組み」神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要 第9号